

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：72622

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320035

研究課題名(和文)「モノ」の世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～

研究課題名(英文) Study on the Material Culture and Women in the Medieval Islamic Period; Based on Glass and Pottery

研究代表者

真道 洋子 (SHINDO, Yoko)

公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：50260146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,700,000円

研究成果の概要(和文)：陶器とガラス器を中心に美術史、考古学、建築学、文献史学の見地からスペイン、チュニジア、トルコ、ウズベキスタン、中国とイスラーム世界を横断する形で現地調査を実施した。これによってイスラーム文化における共通性と地方性の明確化に物質文化が有効であることが具体的に明らかとできた。また、国際学会での発表や国内での研究会を通じて他分野の研究者との交流や情報交換も行い、諸分野を融合した複合的な研究の基盤を形成した。今後ルーヴル美術館の考古学調査隊との共同研究も軌道に乗せることができた。

研究成果の概要(英文)：We conducted field researches mainly on glazed pottery and glass vessels from viewpoints of art history, archaeology, architecture, and study of historical documents in Spain, Tunisia, Turkey, Uzbekistan, and China across the Islamic world. These researches showed concretely that material culture is useful to clarify the common features and local characteristics in the Islamic culture.

We formed a foundation of multiple studies consisting of various fields through the exchanges of information with other field researchers in the domestic and international conferences and meetings. The joint research with the Louvre Museum archaeological mission also got under way.

研究分野：イスラーム物質文化史

キーワード：イスラーム文化 イスラーム考古学 陶器 ガラス器 料理 パラ水 装身具 クフル

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の真道は、これまでイスラーム考古学の分野で、ガラス器やガラス製の装身具類などの研究を進めてきた。対象資料は、川床睦夫氏が30年にわたって組織して実施してきたイスラーム時代の遺跡であるエジプトのフスタート、シナイ半島のトゥール・キーラーニーおよびラーヤの出土遺物であった。これらの調査は、日本の優れた発掘技法と思想によって国際的に高い評価を得、イスラーム考古学の発展と啓発に寄与してきた。

イスラーム時代の遺跡から出土する遺物の量は膨大であり、とくに遺物の機能について重視する中で、それまで対象としていたガラスが、食器や化粧用具、装身具類など、女性に深く関わっており、これらを通じて中世イスラームの女性の生活を明らかとする可能性を認め、本研究の着想に至った。そして、より地域性を明確にするために、ガラスという奢侈品だけでなく、より土地に密着し、意匠などにも独特の特徴を兼ね備える陶器を加えることで、研究に膨らみを持たせる必要性を認識した。

ところが、2011年4月の研究開始当初は、アラブ革命が起きた直後であり、その後、中東地域が混んとした状況に変化していった。申請時には、エジプトやシリアなどの考古学的発掘資料の調査のために渡航し、資料収集や現地調査を行う予定であったが、事態の急変を受け、混乱している地域を避け、もともと予定した調査対象地域の中で、調査可能な地域およびヨーロッパの博物館調査に軸足を移すこととした。

2. 研究の目的

ガラス器と陶器を通じて、イスラーム時代の美術品、考古資料および文献史料を用いて、特にイスラームの女性が営んでいた生活文化を中心に物質文化を明らかにすることをこの研究の主な目的にしている。いわゆる現代の社会的ジェンダー論ではなく、時代を中世に設定し、出土遺物の具体的使用法、絵画や陶器に描かれた図像、文献史料に描かれた記載などから当時の女性の生活や活動の実態について、食生活や化粧、医薬などをテーマとして実証していこうという試みである。

地域的には、地中海地域からアジア地域に至るイスラーム世界の中でそれぞれを対比させながら、各時代・地域の特質や変容について検討を行うことで、イスラームという共通性と地域独特の地域性を物質文化から明らかにしていくことを目指している。

これによって、イスラーム時代の女性を取り巻く世界から見たイスラームの生活文化史の構築を目指し、さらに「モノ」を通じた異文化理解論の創生に発展させる足掛かりとしたい。

3. 研究の方法

本研究では、考古学、美術史、文献史学などの分野にまたがる方法論を用いて、イスラーム時代の生活文化の研究を行うことを特色としている。個別の研究課題としては、料理、化粧、装身等に焦点を当てた。

現地調査による建築および遺跡調査

主な調査対象はイスラーム地域であるが、当初予定していたエジプト、シリア、イランなどの情勢悪化からこれらの地域を避け、スペイン、チュニジア、トルコ、カタール、バハーレン、ウズベキスタン、西安など西から東までを網羅的に調査する。

とくに、建築物は土地との密接なかわりがあるので、イスラーム建築史が専門の深見奈緒子氏とともに各地域の建築的特徴を明らかとし、同時に、各地の遺跡の踏査、歴史博物館や考古学博物館などに収蔵されているその土地の遺跡で発掘された出土遺物についての出版物および情報収集を実施した。

考古資料調査

考古学的発掘で得られた遺物は、年代や地域の情報を多く含んでいる。そこで、国内の諸機関に収蔵されている考古遺物の中で、特に早稲田大学所蔵のフスタート遺跡出土品に関して許可を得て、作図、撮影、デジタル化、分類、分析などを行った。また、完全な形で発見される物は稀有であるため、多くの美術館や博物館に保管されている資料も参考に器形の復元、技術的検討も行った。これらの素材や器形の検討によって、生活に密着した実用品か高級品であったかをも明らかとし、その時代的変遷や地域性などのより多くの情報を得ることができた。

美術品および文献史料の検討

欧米および国内外の博物館に保管されている関連美術品資料の情報収集し、その一部をデータベースとしてまとめた。また、絵画や陶器などの美術品に描かれている意匠の検討を行った。イスラーム圏での現地の諸博物館に加え、ルーブル美術館、大英博物館、ビクトリア&アルバート美術館、ペルガモン美術館、ナンシー美術館などのヨーロッパの主要博物館および湾岸ドーハのイスラーム美術館などで研究課題に即した資料調査を実施した。

また、研究課題に関連する文献史料の解読を進めた。器物の用途に関しては、文献史料の活用が不可欠である。多くのアラビア語やペルシア語で書かれた書物には、様々な器物が登場し、どのように使用されたかが記載されている例も多い。考古資料や美術品などの現物資料と対峙させることで目に見える形で生活文化の復元が可能となる。

学会発表および研究会等の開催

海外では、国際ガラス史学会をはじめとする国際学会で研究発表を行い、研究成果を発信した。また、海外で開催されたイラン文化や地中海のガラスなどの関連会議へ参加し、海外の研究者との情報交換を行った。また、終了年度以降も、成果の発表は継続していく予定である。

国内では、諸関連分野の研究者を発表者に迎え、年に4~5回の研究会(参加者10~15名)を開催した。また、2013年度に二つのシンポジウムを開催した。シンポジウムのテーマは『水をめぐるイスラームの生活と美』(2013年10月5日)、『ナツメヤシの文化と歴史』(2014年1月11日)であった。2013年以降は、新たに立ち上げたコプト・イスラーム物質文化研究会と共催した。

4. 研究成果

現地調査の成果

スペイン調査では、深見がイベリア半島におけるアーチネットの建築的構造について建築史の観点から考察を行い、イベリア半島における初期イスラーム時代における建築工法がヴィシゴート時代からの連続性があることを明らかにした。真道は、コルドバ近郊のマディーナ・アッザフラー遺跡出土の陶器とガラス器について調査し、陶器生産は土地に根差している一方で、ガラス器に関してはレリーフ・カット・ガラスなどの高級品がイスラーム圏の中心である現在のイラク方面から流入していることが判明した。

チュニジアでは、カヒラワーン、ラッカダ、スース、スファックス、マナディールなど遺跡や都市を巡り、北アフリカにおける初期イスラーム時代の物質文化の特質について検討を行った。その結果、特に、陶器に関してはカヒラワーンの大モスクのタイルやラッカダのイスラーム美術館に展示品の中に独特のラスター彩タイルおよび陶器の存在を確認し、ラスター彩陶器の製造についての問題提起に至った。また、ガラス器における高品質なエジプトからの輸入品と現地で工房址も確認できたローカル製品との両方が存在することが明らかとなり、ガラス製品の輸入とローカル生産に関する具体的な二元性について明確とできた。

中国西安では、陝西省歴史博物館、法門寺博物館、慶山寺宝物館などにおいて、唐代を中心に流入したイスラーム・ガラスの実態把握に努め、寺院での保管状況や出土状況、同伴遺物などの確認などを行い、イスラーム・ガラスのアジア交易について、中国側の側面から明らかとした。

トルコでは、アナトリア半島の西部から東部までの建築の特質からアナトリア半島のイスラーム化を建築と考古資料から考察した。とくにルーム・セルジューク期のコンヤおよびその周辺の王宮址の遺構と出土品に

ついて着目し、とくにこの地における陶製タイルの発生と伝播についての知見を得た。また、東南部では、ジャジーラ地域の北端としてのアラブ圏との深い関連を再確認し、とくにイスラーム最初期のハラン遺跡の重要性について着目したが、国際情勢の悪化で今後の検討を断念せざるを得なくなった。

ウズベキスタンでは、ルーブル美術館の発掘調査隊にガラス製品の担当として加わり、ブハラ・オアシスのパイケント、ロミタンなどの遺跡から発掘された遺物について検討を行い、中央アジアにおける初期イスラーム・ガラスの特異性と周辺地域との交易の実態の一端を明らかとした。さらに、今後の発掘調査への継続参加が決まった。

考古資料のデータベースの公開

当初、エジプトに保管されている日本調査隊の発掘品についてエジプト考古最高会議の許可を得て調査する予定であったが、国際情勢から断念せざるを得なくなった。そこで、早稲田大学の本庄校地に保管されているエジプト、フスタート遺跡出土の陶器とガラスについての研究に重点を置いた。これらの遺物は1992年に発掘調査報告書が出版されているが、その後20年が経過し、イスラーム考古学も遺物研究も進展していることから、それらの成果も取り込んだうえで、詳細な発掘情報を備える出土遺物の精査を行うことに意義がある。

収蔵品資料は数万点に及んでいることから、まずは、発掘報告書に掲載されている遺物の確認から始め、これらをデータベース化して、早稲田大学イスラーム地域研究機構が平成26年度日本学術振興会科学研究費補助金(成果公開促進費)を受けて実施した「早稲田大学所蔵イスラーム史資料のデータベース」に資料と研究成果を提供した。これは、<http://fustat.w-ias.jp/>にて閲覧可能である。このデータベースは広く研究者に活用されると同時に、美術館のコレクションと異なり出土情報と収集者の選択が行われていない生の発掘資料を一般に公開する意義は大きく、研究成果の社会還元という意味での成果もあげられた。

個別研究テーマの成果

個別の研究テーマとして、料理、化粧、装身具を三本柱にしており、美術品、考古資料、文献史料から各々のテーマに従って考察を行った。

料理に関しては、尾崎がアラビア語文献の中世料理書を読み解き、特に鍋についての考察を深め、素材による調理法の違いを明らかとした。現在も、文献史料と考古資料の比較研究を行うために真道からフスタート遺跡出土の各種鍋類についての研究を継続している。

また、食に関しては、細密画や陶器に描かれた絵画資料から飲酒文化についてのビジ

ュアルな資料を集積すると同時に、水注が過敏に使用されるなどの同形の容器でも様々な用途が存在することや、地域によって酒杯の形態が異なることなどを明らかとした。

化粧に関しては、薔薇水とクフル(目の周囲にひくアイライン)に着目した。バラ水に関しては、開催した研究会で院生がアラビア科学の観点からバラ水の蒸留方法について発表を行い、さらに真道が容器類の研究を行った。

クフルに関しては、その容器について着目し、古代からイスラーム時代にかけてのクフル用容器の例を集め、古代エジプトの化粧を研究しているエジプト人研究者とも共同で研究会を実施した。これによって、通時的にクフル瓶の器形の変遷と内容物について考察を行うことができた。さらに、カット装飾があるクフル小瓶については、ガラス作家の協力のもと製造技法的研究も行った。また、文献史料でもエジプトのゲニザ文書からクフル顔料について研究会で院生が発表を行い、これらが中世には化粧というよりは医療行為としての側面が大きいことを明らかとした。したがって、医薬面からの考察を加味して、今後研究を継続することとした。

装身具に関しては、フスタート遺跡出土の各種装身具について、真道がまとめて、その概要をゲニザ文書との比較から明らかとした。

当初、絵画や工芸品、文献史料に現れる女性像を取り上げて考察を深めようとしたが、例が少なく、直接的な検討は難しかった。しかし、このことは裏返って、表に出てこない女性を類推する手段としての物質文化研究の有用性を示すこととなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

①深見奈緒子、イスラーム建築の美と生活空間の創出、イスラーム科学研究、第 10 号、2014 年、83-92 頁、査読無

②真道洋子、フスタート遺跡出土エナメル彩装飾ガラスをめぐって、第 20 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究、2013 年、28-36 頁、査読無

③榎屋友子、アブー・ナスル・アル＝バスリー作押し型装飾鉛釉断片、國華 1416、2013 年、35-37 頁、査読無

④真道洋子、イスラーム時代のピンサー装飾ガラスに関する考察～エジプト・ラーヤ遺跡出土品と連理参考館所蔵樹木坏の比較から、天理参考館報、第 25 号、2012 年、79-93 頁、査読無

⑤真道洋子、天理参考館所蔵ピンサー装飾樹

木坏をめぐって～ピンサー装飾ガラスの様相～、第 19 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究、2012 年、15-22 頁、査読無

⑥深見奈緒子、10 世紀、アンダルシアのアーチネットの建築史的考察、第 19 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究、2012 年、153-163 頁、査読無

⑦尾崎貴久子、イスラームの医と食、東洋学術研究第 51 巻第 1 号、2012 年、63-91 頁、査読無

⑧真道洋子、中世エジプトのガラス製装身具、民族藝術、28 号、2012 年、41-46 頁、査読有

⑨真道洋子、イスラーム・ガラスにみる 8 世紀における社会の変容と展開—フスタート遺跡とラーヤ遺跡を中心に、古代、125 号、2011 年、97-118 頁、査読有

⑩尾崎貴久子、中世イスラームの鍋、イスラーム地域研究ジャーナル、第 4 号、2012 年、25-33 頁、査読有

[学会発表] (計 6 件)

①真道洋子、イスラームにおける聖なるものと聖なる場、地中海学会シンポジウム聖なるものと聖なる場(招待講演)、2014 年 6 月 15 日、國學院大学(東京都渋谷区)

②真道洋子、日本調査隊によるエジプト、フスタート遺跡の発掘調査、国立科学博物館企画展『砂漠を生き抜く—人間・動物・植物の知恵』関連講演会(招待講演)、2013 年 12 月 15 日、国立科学博物館(東京都台東区)

③尾崎貴久子、中世期イスラーム世界の料理書と医学書の関わりについて、京都大学東洋史研究会大会、2013 年 11 月 3 日、京都大学文学部(京都府京都市)

④尾崎貴久子、中世イスラーム都市社会の飲食、日本オリエント学会第 55 回大会(招待講演)、2013 年 10 月 26 日、京都外国語大学(京都府京都市)

⑤真道洋子、中世エジプトのクフルとその容器、東洋文庫特別講演会、2012 年 6 月 16 日、財団法人東洋文庫(東京都文京区)

⑥ Yoko SHINDO, Islamic Glass with Impressed Decoration: The Problem of Dating and Production, 19e congress de l'association internationale pour l'histoire du verre, 10th Sep. 2012, Piran (Slovenia)

[図書] (計 4 件)

①真道洋子、国立科学博物館叢書⑬『砂漠誌

人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』(縄田浩志・篠田謙一編著)、東海大学出版部、2014年、450頁(216-217,346-351,359-362頁)

②柁屋友子、イスラームの写本絵画、名古屋大学出版会、2014年、244頁

③真道洋子、アラブのなりわい生態系②ナツメヤシ、臨川書房、2013年、315頁(94-100頁)

④小林一枝、マルコポーロが見たユーラシア『東方見聞録』の世界(共著)、2013年、横浜ユーラシア文化館、80頁(60頁)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
フスタート遺跡出土遺物データベース
<http://fustat.w-ias.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真道 洋子 (Yoko SHINDO)
公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員
研究者番号：50260146

(2) 研究分担者 なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

深見 奈緒子 (Naoko FUKAMI)
早稲田大学・イスラーム地域研究機構・教授
研究者番号：70424223

柁屋 友子 (Tomoko MASUYA)
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：40300735

尾崎 貴久子 (Kikuko OZAKI)
防衛大学校・外国語講座・准教授
研究者番号：00545733

(4) 研究協力者

ロッコ・ランテ (Rocco Rante)
ルーヴル美術館・イスラーム部門・研究員

川床 睦夫 (Mutsuo KAWATOKO)
イスラーム考古学研究所・所長

小林 一枝 (Kazue KOBAYASHI)
早稲田大学・国際教養学部・非常勤講師